湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：　湘南医療大学

所　属：　保健医療学部　看護学科

名　前：　野口　京子

作成日：　2025 年 4 月 23 日

1. 教育の責任

本資料作成者（以下、作成者）は、2022 年度 4 月より、本学保健医療学部看護学科臨床看護学領域に講師として着任している。2023 年度 4 月より、学科の担当科目に加え、本学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻健康増進・予防領域　感染看護学分野の院生の講義・研究指導に携わっている。

本学の理念は、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」であり、その考えの基、保健・医療・福祉・教育のヘルスケアシステムを作り、地域の人々の幸せに役立つ人材の育成を目指している。本学の理念に基づき、地域医療に貢献できるスペシャリストとなる人材育成が重要な役割の1つである。そこで、教員は、看護学科においては、基礎的な知識・技術はもちろんだが、実戦での応用力を身に着けた人材の育成が責務である。これらの教育の責務の中で、作成者自身は下記科目を担当してきた。

【看護学科】

- 1年生　看護基盤実習Ⅰ（感染対策演習・実習指導）
- 1年生　ナーシングスキルⅠ（スタンダードプリコーション）
- 1年生　薬と毒性学（薬といたちごっこ）
- 2年生　ナーシングスキルⅡ（感染対策：滅菌操作）
- 2年生　プロフェッショナル論Ⅰ（感染症看護専門看護師）
- 3年生　看護研究（実験研究に関する講義担当）
- 3年生　ナーシングプロセスⅡ（看護過程の展開）
- 3年生　成人看護学方法論Ⅱ（慢性期看護）
- 3年生　急性期看護実習（実習指導）
- 4年生　統合実習（実習担当）
- 4年生　チーム医療論（学科・学部混合科目：WG）

2. 私の理念・目的

1)　私の理念

作成者が看護理念に掲げることは、「患者さんのために最善を尽くすこと」である。この「患者さんのために最善を尽くすこと」を実践できるには、以下を網羅した教育実践が重要であると考える。①臨床での応用力を持った実践者の育成、②組織の一員として協働できる人間力の向上、③Evidence-Based Medicine（以下、EBM）に基づく適切な判断力の向上

①　臨床での応用力を持った実践者の育成

基本的な知識有していても、臨床とのギャップに戸惑いを見せる学生が多い。そのギャップを埋めるためには、臨床で起こりうる様々な状況を考慮した場面を提供することで、基本的な技術の使い方、その応用方法について、学生自らが開発できるよう支援することが必要であると考える。基本的な知識・技術を積み重ね、臨床を考慮

したデモンストレーションを繰り返すことで、応用力につながるものと推測する。

② 組織の一員として協働できる人間力の向上

医療現場において、チームの一員として協働することが求められくる。実際に、1人で患者の看護を担うことは不可能であり、チームで力を補いながら、患者の看護に努める必要がある。そのため、学生のころから、グループワークなどを通じて、チームで働くこと、そして、どのようにチームに貢献していくか学ぶことが重要だ。そのため、自分自身の性質を理解しながら、成長できるよう支援していきたい。

③ EBM に基づく適切な判断力の向上

医療では、EBM に基づく実践が求められている。EBM に基づく論理的思考方法を学び、それを実践できることが重要である。また、医療現場では、様々な判断をしなければならない場面が多い。リーダーや管理者など、職位が上がるごとに、様々な判断が必要となる。そのような時に、論理的思考を持って、判断できる力の育成に貢献することが重要であると考えている。

2) 理念をもつに至った背景

以前、感染症看護専門看護師として介入した事例として、治療方針の対立が起こった事例を経験した。その際、患者の望む治療が受けられない状況であったため、医療者の考えを橋渡しする倫理調整を行った。患者・家族の希望を尊重しつつ、EBM に基づく治療方針とのすり合わせを行い、結果として患者・家族に満足する治療方針を決定することに至った。この経験を通して、我々医療者は、患者・家族を中心として支援していることを忘れることなく、チームでの協働が重要であることを実感した。このような事例以外にも、感染看護の立場では、組織横断的に活動する必要がある現場がある。そこでは、立場の違いから意見の対立などが起こり、調整が難航する場面がある。そのような判断に迷う場面において、最も忘れてはいけないことは「患者さん」のために良い選択をすることと考える。以上のことから、「患者のために最善を尽くすこと」を自身の理念として働くに至った。

3. 教育の方法・戦略

上記理念に基づき、講義の際に学生が主体的に学習できるよう、アクティブラーニングの方略を考慮した講義・演習の授業計画を構成し、実践している。

① 座学講義の方針：基本的な知識だけでなく、事例を紹介することで、実践をイメージし、講義で得た知識をどのように応用するか、考えられるようにする。

- 基本的な知識の復習⇒講義で押さえたい知識の提供⇒提供した知識を使用した（根拠とした）作成者が経験した臨床の事例を紹介（事例についてディスカッションを含む）という流れをベースに授業計画を行った。
- 学生が臨床の場面を想起できるように1講義1事例は導入すること

- 事例について、教授した知識を持って考えられる内容について問いかけ、学生自身に考えさせる時間を設ける（ディスカッションや、ワークを実施）
- 臨床の場面を想起しながら新たに得た知識を定着できるよう、自分の意見を述べる場を含める（ディスカッションや、リアクションシートの記載を実施）

② 演習の方針：座学で学んだ知識を、学生自身が応用して実践できるよう、学生自身に考えさせるような工夫をする。

- 演習科目において、まずは事前課題の下、学生自身で実践方法を考えさせる⇒根拠を用いて正しい方法をデモンストレーションする⇒デモンストレーションから学んだ内容を含めて、実践してみる、ということを基本的な流れとしている。
- 今までは、最初から学生にすべての情報を与えていたが、最初にすべて情報を与えられるのではなく、学生自身が持つ知識・技術を持ってどこまで行えるか考えさせるように促す
- そこで、学生自身の自主性を尊重できるよう、ファシリテートする
- 学生の意見を踏まえ、模範解答として作成者がデモンストレーションを行う。ここでは、必ず科学的根拠を説明しながら行うようにしている
- その後、適切な方法で実践し、知識・技術が定着できるよう、グループダイナミクスが得られるよう支援している

③ 実習時の方針：学生自身の学修速度に合わせた指導を行い、学修面だけでなく、心理的・社会的な支援を行い、学生自身成長に寄与する。

- 実習の場面において、座学での学びと臨床での実践が結びつくよう、学生の学習ペースに合わせて指導している。（時には座学の教科書・資料に戻りながら、指導する）
- 臨床実習では、患者・家族、医療従事者など、様々な人と関わる。社会人と敷いての礼節を含めて、学生自身が医療従事者としての意識を高められるように指導している
- 実習先の指導者と密にコミュニケーションを取り、学生が円滑に実習を行えるよう配慮している

4. 学習成果

- 講義・演習科目についての授業評価アンケートでは、オムニバス講義のため、作成者自身の講義評価を行うのは困難である
- 講義・演習の自身が担当する各講義回に行ったリアクションシートでは、「具体的に自分はどこができないのか分かった。」「事例を聞けて興味が深まった」などの意見を得られた。

5. 改善のための努力

1) 学習した内容について、知識の定着のための戦略
知識の定着を図ることは重要であるが、作成者自身が担当する講義は、オムニバス科目の1講義の担当であることが多いため、知識の定着を確認するのに定期試験で確認することしかできていない。講義終了の際に、ミニテストの実施などを行い、講義内容の知識の定着を確認していきたい

2) 講義の満足度の確認
1)同様、オムニバス講義のため、作成者自身の講義評価は難しい。現在は、聴講カードに感想を記載しているのみだが、今後は数値的にも評価できるよう、聴講カードに工夫していきたい

6. 今後の目標

【短期目標】

- 作成者自身が行う講義満足度の確認のため、リアクションシートに満足度を数値的に評価する項目を作成する（達成目標：2025 年度末まで）

【長期目標】

- 講義の取り組みについて、学会発表など、第 3 者の評価を受けられるよう努める

【添付資料】
資料なし